

ビバハウス便り NO.83 11名の参加で、『第1回ビバ同窓会』開催される
ビバハウス 責任者 安達 俊子

先に、5月12日付で、『ビバハウス便り NO.82 第1回ビバハウス卒業生の会誕生か?』を『のぼり通信』に投稿したが、NPO余市教育福祉村の総会用資料が多く、掲載されなかった。そのため全国から、私たちの親族や、懇意なビバ関連の父母の方々から、『俊子さんがお体でも悪くされたのですか?』とのご心配のお電話を頂いた。なぜ前回『ビバハウス便り』が載らなかったのかを簡単にでも書いて頂くべきだったと、今更ながら、後悔している。まだ腰の痛みは、完全には取れていないが、整体治療の腕の良い先生のお陰で、少しずつ回復しているのでどうぞご安心頂きたい。ご心配をお掛けした事をお詫びし、温かいお心遣いに心から感謝いたします。(82号はビバHPには載せました。)

これを書いている今日6月10日は、前号とは一変、ビバの周りで燦然と輝いていた黄金色の満開のれんぎよの花は姿を消し、いっそう濃くなった緑を背景に鮮やかな濃いオレンジ色の大きなつつじの花が咲き誇っている。前号に書いた『ビバ同窓会』が初めてこの8日(金)午後7時からビバハウスで開かれた。

幹事を引き受けてくれた、道南からビバに来て、現在は町内の老人福祉施設・フルーツシャトーに勤務しているKo君が勤務の間を縫って3回もビバに来てくれて、すべての準備を整えてくれた。みんなの個人負担の限界は千五百円、お店では出来ないので、ビバハウスを会場にし、勤務をしている人のことも考えた時間にした。静岡、埼玉、福島からの参加者もいるので、昔ビバで皆でワイワイやったジンギスカンをすることにした。ジンギスカンにはどうしてもアイヌねぎがいると言うことで、おじさんは、『熊出没注意』の看板の出ている、町内豊丘のビバの山小屋まで朝早くでかけ、大きくて柔らかいアイヌねぎを一抱えも採ってきた。それぞれがビバの食堂に入ると、みんな自然に自分がビバにいた時に座っていた席に座った。それから自分の右と左にいた人の名前を挙げて、懐かしんだ。『彼は今どうしているだろう?会ってみたいなあ!』の声が続いた。

彼らの青春の1ページがしっかりとビバに根付いていることを実感した時だった。Ko君の司会で全員がビバでの思い出と近況を語りあった。ビバのHPで『ビバハウス便りNO.82』を見て同窓会のことを知り、真っ先に前日7日に福島から駆けつけてくれたTeちゃんは3人の可愛い子供のお父さんになっていた。夜はアルバイトで稼ぎながら、道内医療私大の3年生になっている者、ビバにいるときからイラストレーターを志し、フリーのプロとして活躍している者、老人福祉施設の大切な働き手、札幌でパウンドケーキを焼いていて、今度は私のお願いでシフォンケーキに挑戦してみると言ってくれた若者。

ビバ創設まもなく、なれない水仕事で、手が使えなくなってしまった私の依頼に応じて静岡から駆けつけてくれた元ビバ・ボランティアの水野紀子さんも囲んで大きな声で談笑している彼らは、まるでビバハウスの当時の雰囲気そのままだ。まさにタイムスリップだ。ビバがいつまでも彼らの『心の故郷』として、どんなに辛い時にでも彼らの心の支えになれるよう祈る気持ちで、彼らとの再会を約した。